

所 陵

No. 69

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



黒漆塗玳瑁螺鈿合子（北村昭斎作）

● 目 次 ●

大英博物館を訪れて	安武 真隆	2
貝多羅経随想	下間 頼一・佐々木 堯	6
平成26年度 夏季企画展「角倉素庵と俵屋宗達」を終えて	林 進	8
大阪樟蔭女子大学図書館所蔵嵯峨本『古今和歌集』雑考	本多 潤子	11
「牧村史陽氏旧蔵写真」の研究とデジタルアーカイブ化	内田 吉哉	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171（直通） Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

大英博物館を訪れて

安 武 真 隆

英国への出張が入るとしばしば訪れるようになったのがロンドンにある大英博物館である。今回の博物館長からの執筆依頼に対し、2008年に現地を初めて訪れた際の備忘録に若干の手を加えることで応えることにしたい。

まずは古代ギリシアのコーナーに直行。よくもまあ、これだけの遺跡を丸ごと持ち帰ったものだ、と驚くほどの物量と規模である。パルテノン神殿の大理石の彫刻などには圧倒されたが、ここはロンドンであって、アテネではない。アテネの国立博物館を訪れた際に、本場ギリシアであるはずなのに、何となく展示が貧相な感じがしたし、パルテノン神殿でもレプリカが多かったのだが、これで合点がいった。考古学界においてギリシアは列強の植民地分割の縮図のような地位にあったようで、どの遺跡を発掘するか、英独仏などがそれぞれ排他的に独自のシマを持っていて、現地に行っても遺跡についての解説は、発掘した国の言語でなされる、と聞く。そうした列強の「支援」なしでは遺跡の発掘も保存も修復も不可能であったであろうとはいえ、何だか複雑な気分になる。



古代ギリシアのパルテノン神殿の一部を再現したもの

そういう気分に対する応答、ということなのか、「パルテノンから持ち出された彫刻は現在どこで展示されるべきか」が論議を呼んでいる点を解説するチラシも置かれていた。それによれば、「1980年代初頭より、ギリシア政府は大英博物館にあるパルテノンの彫刻物をアテネに返還することを求めている。ギリシア政府はまた、大英博物館による彫刻物の管理に対して、その合法的な資格に疑念を差し挟んでいる。」関連して、ギリシア文化省のウェブサイトも紹介されていた (www.culture.gr)。

これに対する大英博物館の主張は、以下の通り。

「世界的な博物館として人類の文化的な偉業を物語るという本博物館の目的に、パルテノンの彫刻物は不可欠である。大英博物館に展示されることで、ギリシアが、古代世界の他の偉大な文明、とりわけエジプト、アッシリア、ペルシア、そしてローマと持っていた文化的関連が明瞭に示されるし、古代ギリシアが、後のヨーロッパ、アジア、アフリカの文化的な偉業の達成に果たした決定的貢献もまた、跡づけ理解することが出来る。存続している彫刻物は八カ国の博物館に分割されて所蔵されており、アテネでもロンドンでも品質の点ではほぼ同等であり、アテネとギリシアの歴史にとっての重要性や世界の文化にとっての重要性にとりわけ焦点を当てることで、これら彫刻物についての様々な相互補完的な物語を語る事が可能となる。このような体制によって、大英博物館の信じるところでは、世界に対する公的な利益を最大化するのに資するばかりか、ギリシアの遺産の普遍的な性格を明示することが出来る。」(更なる説明については、www.britishmuseum.org を参照)

確かに、大英博物館の展示は、相互に有機的に関連していて、当博物館が主張するような目

的に効果的に達成するようにアレンジされている。しかし、そうした機能を持つ博物館が何故ロンドンにあるのかについては、そのような機能を備えた博物館をこれまで形成してきたという「実績」に専ら求められよう。しかも、その形成のプロセスには、暴力による略奪が少なくない形で介在し、合法性という論点についてはギリシア政府のこだわりにも一理ある。とはいえ、それがギリシアでなければならない必然性も、その機能を維持する能力をめぐるギリシアへの信頼も、あまりあるとは思えない。また、暴力が介在したとはいえ、英国がそのような既成事実を積み重ねるだけの能力を保持してきたこと自体は、認められるべきであろう。かつてギリシアを旅行した際、現地に残る古代の円形劇場の大理石の一部が、20世紀に入ってから撤去され小学校の建設資材として流用されたとの説明を受けたことがある。無邪気に彫像のまわりを駆け回る現地の小学生や、修学旅行で来たらしいフランスの小学生の一群を見るにつけ、ギリシアでの光景とのギャップを感じないではいられなかった。

さて、大英博物館でもっとも印象に残ったコレクションは、古代アッシリアの神殿のレリーフである。これも膨大な量が博物館の壁に埋め込まれる形で展示されている。中でも圧巻なのは、巨大な対になったニネヴェ（前612年の滅亡まで存続した、アッシリアの首都）の彫刻、



人面有翼牡牛像

人面有翼牡牛像、とでも言うべきものである。19世紀の発掘隊がイラクの北方で発見し英国に持ち帰ったもので、アッシリアの神殿の中にあったと推定されている。

アテネのコレクションの時と同じく、何故これがロンドンに…と感傷的な気分にはなったが、とにかくデザインといい構図といい、見事なレリーフの数々に魅了された。紀元前612年にメディアと新バビロニア連合軍に攻略され、破壊されて以来埋もれていたものを、イギリスの発掘隊が見出した際に、持ち帰りたくなった気持ちも分からなくはない。現地の人々はこれらの彫刻物を知りもせず、イスラム教以前の唾棄すべき異教の神殿跡でもあるから、大して関心も持たなかったのだろう。多くのものが大英博物館に持っていかれた結果、現地には状態の良いものはほとんど残っていないとの話も聞いた。

写真集を購入。中東部門学芸員の手による次のような「序」がついている。

「アッシリアの神殿彫刻はイラクからやって来た。かの国は、過去30年間、嘆かわしい被害を被ってきた。イラン・イラク戦争、第一次湾岸戦争、経済制裁、そして最後に第二次湾岸戦争とその後の展開は、全て、イラクの文化遺産に損失をもたらしてきた。本書の主題をなす彫刻物は全て現在、大英博物館に所蔵されているが故に、近年の略奪を免れた。しかし、イラクに残されたものに、本コレクションに匹敵するものが何かあるだろうか？

幸いにして、アッシリアの中心地であった北方イラクの考古学上重要な地域は、この国の南部におけるような徹底的略奪、考古学・歴史学の記録に残る破滅的な帰結を被らなかった。しかしながら、この地域についても無傷ではすまなかった。第二次湾岸戦争以前においてすら、コルサバドの人面有翼牡牛像の頭部は盗まれ、分割された。この頭部は復元され、現在バグダッドのイラク博物館に所蔵されている。ニネヴェにおいては、センナケリブ神殿の発掘された彫刻物を保護するための現代的な鉄製の網状の屋根が、侵攻の直後に略奪され、その下にある



人面有翼牡牛像の傍にあった小さなレリーフ

彫刻物を風雨に晒してしまった。屋根は再度設置されたものの、彫刻物は危険な状態のままである。ニムロデでは、2003年4月10-11日、アッシュールナツィルパル二世の北西の神殿に盗賊団が押しよせた。同じ頃、バグダッドとモスルの博物館は略奪にあい、ひざまずく魔神のレリーフが盗まれた。3週間後の5月3日には、聖なる木の上の頂きを示すレリーフの断片と翼のある円盤が盗まれた。しかしながら翌日には、少数のアメリカの軍事部隊がこの地にキャンプを張り、更なる略奪を阻止することが出来た。本書執筆の段階〔2008年4月〕で、ニムロデの治安状況ははっきりと悪化し、この地を訪問することを極めて困難なものとしている。」(Dr. John Curtis, in *Assyrian Palace Sculptures*, p. 7)

考古学者にとって2003年4月は忌むべき時、不可逆地点なのだろう。私もブッシュに靴を投げたくはなる。もっとも今となっては投げても仕様がなし、昨今のイラクにも期待できないが。

並行して、古代バビロニアについての特別展が開催されていた。こちらはイラク南部にあった古代文明で、アッシリアを滅ぼした新バビロニアが主たる対象のようであった。バベルの塔についての伝承の継承と様々な読み替えの歴史

の展示も興味深かったが、展示の最後には、この遺跡の復興事業の政治性を示唆する解説が展示されていた。

それによれば、古代バビロニアの復興事業に熱心であったのは、当時のイラク大統領、サダム・フセインであった。フセインは、イシュタル門と行列通り、ニンマー神殿、ヘレニズム期のギリシア式劇場の復元を目指した。これらの復興事業は、イラン・イラク戦争の終盤の1987年9月に開催された第一回バビロン国際フェスティバルに向けて準備されたものであった。その公式テーマは「ネブカドネザルからサダム・フセインへ、バビロンのルネサンス」であり、「これら偉人の遺産は、時間と歴史を超えてサダム・フセイン大統領の偉大な足跡と荘厳な輝きに融合している」と宣言された。この行事のために、ネブカドネザルとサダムの肖像が並んで刻まれた特製メダルも発行されたという。

このように、古代バビロニア復興事業は、時の権力者への個人崇拜のために利用されたとも言えよう。他方、このフェスティバルでは、イラクの考古学者によって、考古学資料や楔形文字のテキスト、ハロドトスのような歴史家の記述を尊重して復元を目指した面もあったという。大英博物館の特別展主催者は、「バビロンを再興させようとするイラク人の願いに全く共鳴しないわけではない」としつつも、建築保存に携わる者の大半にとって完全に受け入れがたい事業もあったとする。この地域には三つの人工湖が掘られ、その際に生じた巨大な盛土はユーフラティス川の古い川床の上に積まれ、その



お気に入りの一つ、ライオン狩りのレリーフ

頂上には大統領のための宮殿が建設され、古代の遺跡を見下ろす形になったからである。

考古学者にとってのバビロンの悲劇はこれに留まらなかった。ここでは、特別展の最後に揭示されていた解説を紹介して結びに代えよう。

「バビロンにとってサダム時代に起きた事が悪かったことは否定できない。しかし、第二次湾岸戦争の後に起きた事も、弁明の余地が無い。2003年4月、バビロンにアメリカ軍によって小規模な軍事キャンプが設置された。(著者が大英博物館から派遣されたグループとともにバビロンを訪れた) 2003年6月まで、キャンプは依然としてそう大きくはなかった。しかしながらその後、急激に規模が拡大し、2004年の夏には、新聞の公開情報やウェブサイトの写真から判断する限り、バビロンにおいて計り知れないほどの規模の軍事活動が展開されるようになり、それによって遺跡を損傷させる恐れが広く懸念されるようになった。キャンプは150ヘクタールにも及び、バビロンの古代都市の中心部の右側に設置され、古代都市の内壁をまたぎ、その高台には、2千人の兵士の為の家屋が設置された。2003年9月のキャンプを引き継いだポーランド軍によって、2004年末にバビロンをイラク政府に返還する決定がなされたのは、国際世論の力の為である。この返還を記念してある会合がバビロンで12月11-13日に開催され、この会合のためにポーランド軍当局は当該軍に随行していた考古学者に報告書作成を委託した。



復元されたバビロンの古代都市の真横に展開する米軍キャンプの写真

http://iwa.univie.ac.at/iraqarchive44.mi#us_base

この長大で非常に有益な文書は『バビロンの考古学的遺跡の保全条件に関する報告書』と題されている。しかしながら、ポーランドの報告書の価値を貶めるわけではないが、イラク文化省は更なる報告書の作成に利益を感じ、まずバビロンで作業に従事するイラク人の考古学者によって、次に筆者自身によってそれが作成されることとなった。

(中略)

古代世界でも最も有名な場所の一つの中心部に、全世界の文化的遺産の一部を構成する場所に、これまでにこの場所で何がおきたのかを一顧だにせず軍事キャンプが設営されていることの強烈さを強調してもしすぎることはない。この所業は、ストーンヘンジやピラミッドの近くに軍事キャンプが設置されることに相当し、このようなことが許されるべきではない。それはさらに、よく知られたバビロンという土地に対する無知を示すことによってイラク人を侮辱するものでもある。どんなに軍が注意深く振舞ったとしても、大規模な損傷をもたらすことなく軍事キャンプを設営することは不可能である。大量の軍事車両がこの地を走り回っており、時にはTブロックのコンクリートを運搬している、これらの活動が、地下にある非常に脆弱な考古学的埋蔵物に損傷を与えることは不可避である。被害の質も量も依然として計測不可能である。しかしながら重量の大きい車両が有名な「行列の道」を通過し、この路上を覆っている古代のレンガの板の多くを破損していることを、我々は間違いなく知っている。」(John Curtis, *The Site of Babylon Today*, in *Babylon: Myth and Reality*, pp. 213-220)

参考文献

I.L. Finkel and M. J. Seymour (eds.), *Babylon: Myth and Reality*, The British Museum Press, 2008

Paul Collins with Photographs by Lisa Baylis and Sandra Marshall, *Assyrian Palace Sculptures*, The British Museum Press, 2008.

<http://iwa.univie.ac.at/index.html>

博物館運営委員 政策創造学部教授

貝多羅経随想

下 間 頼 一・佐々木 堯

1980年12月25日より1981年1月9日まで、小沢康美氏（福井工業大学教授 当時関西大学大学院生）と、冬休みを利用してネパールへ調査研究の旅に上った。一仏教徒として釈尊生誕の地 Lumbini（ネパール南部インド国境に近い）への参詣と、技術文化史の現地調査が目的である。貝多羅経1冊を1981年1月4日首都カトマンズの南15kmにある小都市国家 Patan の骨董店で購入した。

Patan は Lalitpur と呼ばれ、Baghmati 川南岸の丘の上の芸術の都。優れた宝石加工や金属加工技術を今に伝えている。グルカの進攻に備えた城郭に囲まれた小都市国家の様な町である。7世紀中頃に建設され、中世にマッラ王朝の主要都市として栄えた。1639年パタン王朝成立により首都となったが、1768年グルカ王朝に征服された。

人口は約13.5万人（1970年推定）、大半がネワール族。北部ヒマラヤ山麓にはシェルパ族や

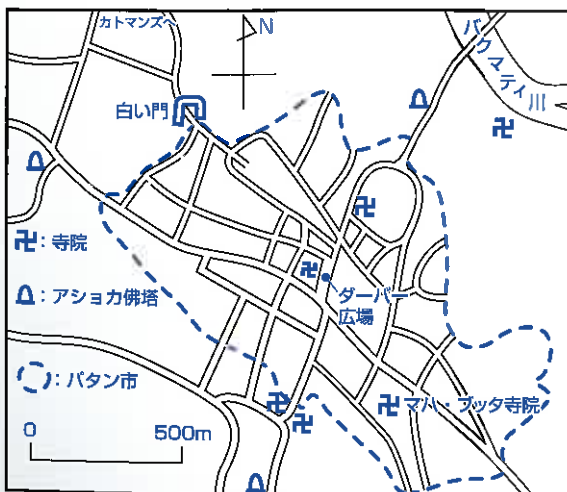
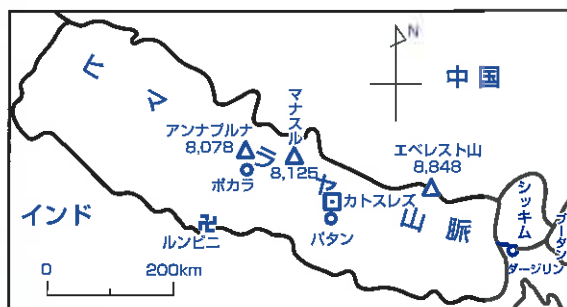
タカリー族など山岳少数民族が住む。彼等は山道で鍛えた強靱な体力と精神力を持ち、親切であった。



Patan 北西の白い Patan Dhoke（門）より入市、狭い暗い石畳みの Khacha Tole（通り）を進む、先ず Hiranya Barna Mababihar（仏教寺院）へ参詣する。Golden Temple と呼ばれ、内院は金色燦然とし、重厚敬虔な雰囲気満ちている。次いで Museum や Old Royal Palace of Mallaperiod へ。中庭に Sila（石）Patra（紙）of Licchibi（リチビ）Lipi（文字）の碑が立つ。高さ65cm、幅34cm、厚さ11cmの石碑に碑文がぎっしり刻まれている。早速乾拓を取る。

市の中心 Durbar Square（ダーバー広場）へ到着した。朝霧濃く、人影は少なく、静謐な仏教的な雰囲気が満ちている。朝の冷気を胸一杯に吸い込む。周りは寺院が軒を連ねる。北方より反時計回りに小さな Narayan 寺院、中くらいの Bhimsem 寺院、立派な3層の Krishna 寺院、2層の Char Narayan 寺院、3層の Radhn Krishna 寺院、Big Bell（鐘楼）、壮大な3層の Radha Krishna 寺院（Chayasn Devel）と連なる。寺院は精巧な木彫で飾られている。透かし彫りでリアルで精緻である。

祖形仏教にヒンズー教とチベット仏教の影響が濃い。宗教的内容は一介の訪問者には理解しがたい。祖形仏教の色濃い寺を訪れ僧達と阿弥





陀経をあげ、焼香し仏教徒としての一体感に浸った。市全体が仏教的雰囲気包まれ、ネワール族は敬虔で礼儀正しい。合掌し「ナマステ」。

ダーバー広場を出て南東へ狭い小道を進むと、Maha Bovdha Mandir 仏寺に至る。999体の石仏がきりっと立っている。この寺の隣の骨董店で貝多羅経を購入した。長さ31.2cm、幅5.3cm 全厚さ2.5cm。37枚のバイタラ葉を重ね、厚さ4.4mmの板2枚で挟む。貝多羅はサンスクリット pattra の音訳で、植物の葉の意である。

インドではシュロ（棕櫚）科のターラ樹の葉は古来書写材料として用いられた。ターラの葉は薄く強く、長大で長さ3mにも達する。葉を乾燥させ、長さ45～60cm、幅7cm位に切り揃え、両面に stylus 鉄筆又は堅木の尖筆で文字を書くと、黒い樹液が染出て、ペンにインクを付けて書いたように文字が美しく浮かび上がる。仏教の経典など書写するのに用いられる。数十枚重ね、中央に2カ所孔をあけ紐を通して綴じる。同寸の木の板を表裏に添える。

インド・ミャンマー・チベットなどで仏典は貝多羅に書かれ写され伝えられてきた。他に医薬品の調合法など日常用にも供された。購入した貝多羅はインド系のシンハリ文字が表裏にぎっしり綿密に書かれていた。

インドは2百の言語、百の文字と俗に言われている。貝多羅は紙・ parchement（羊皮紙）と共に古代の主要な書写材といわれる。

オリエントに弘通するセム系文字の影響を受けブラフミー文字が生まれ、更にカロシュティ文字が生まれた。ガンダーラ地方で調査した仏塔に寄進者の名前がカロシュティ文字で刻まれていた。インドが文字使用を始めた時、文字と共にヤシ科の葉が書写材として利用された。

熱帯のヤシ科植物は実に3000種に上る。パル



ミラヤシとコリハヤシが南アジアや東南アジアで用いられた。筆者が入手した貝多羅葉は薄く繊維が細く整っていることからコリハヤシと考えられる。書写法はペン書きと、線刻とがある。入手資料は鉄筆書きである。

本資料の文字は崩れた丸文字で判別しがたいが、長い渦巻状の文字等の特徴により、シンハラ文字と推定される。古来インド北西部に居住していたシンハラ族が、アーリア族の南下やドラビタ族との関係で遠く海路スリランカに仏歯と仏典を持って移住した。

現在シンハラ族はスリランカ人口の7割を占める。

シンハラ文字はデヴァナガリーやタイ文字と同系で独特のうず巻き型をした表意文字である。ラテン文字と異なり、子音だけを表す文字はなく、すべて母音を含んでいる。基本字として54文字がある。

パピルスやパーチメントは過去のものとなったが… 貝多羅は2千年近い歴史を持ち、今なお用いられている。文字の不滅の生命に感銘をうけた。

書写材と文字に関し、安江 明氏の論文より多大のご教示を頂いた。深謝いたします。

文献

安江 明 やしの葉写本研究ノート

図書館人文科学研究科アーカイブス学専攻

下間 頼一：名誉教授

佐々木 亮：文学研究科博士課程後期課程在学

平成26年度 夏季企画展「角倉素庵と俵屋宗達」を終えて

林 進

夢のような四ヵ月間でした。企画展「角倉素庵と俵屋宗達—江戸初期の能書家と絵師、知られざる二人の偉業—」(2014年6月15日～7月19日)は、今も、私の心に鮮明に面影として残っています。

9年前に財団法人和文華館(学芸員)を定年退職して以来、この度、平成26年度春学期の期間限定ですが、関西大学博物館の嘱託学芸員(肩書きは企画コーディネーター)を拝命しました。この齢になって、学芸員になるとは、思ってもみなかったことです。再び学芸員の仕事の楽しさを経験することができました。ありがたいことです。

秋学期の10月から11月に博物館実習展を行う学芸員資格課程の受講生の参考になればと思い、本誌をお借りして、今回の展覧の立案と実施について記しておくことにします。

4月11日(金)、博物館実習の第一回目の授業(クラス編成・日程表配布等)を終えて、博物館館長室にて、米田文孝教授、熊博毅博物館事務長、山口卓也学芸員、そして非常勤講師林進が、夏季企画展の実施について話合いました。以前に、実習展に際して、私のコレクションによる小展覧(実習展と同じ6日間、壁付大ケースを使用)を開くことを希望しておりました。

本年、従来の第一展示室をリニューアルして特別展示室に改めたので、現在開催されている平成26年度春季企画展「関西大学名品万華鏡」(4月1日～5月18日)の後、同特別展示室で、6月から7月の一ヵ月の期間で、何か企画展をやっていたらいいかというお話でした。願ってもないことなので、すぐにお引き受けしました。会期は、博物館の要望により6月15日(日)から7月19日(土)に決まり、展覧のテーマは二週間後に通知することにしました。早速、山口氏に特別展示室の図面(ケースの形態と個数、各法量、配置。)のコピーをお願いしました。まず展示空間を把握することが、展覧企画の第一要件だからです。「名品万華鏡」展のケースの配置は変えないで、そのまま使用することにしました。理由は、鑑賞者の導線が比較的スムーズであったからです。後日、このケースの配置が講演会をこの展示室で行うことを可能にしました(写真1)。

本年、特別展示室の左側壁面に可動式壁面を持つ大型壁付ケースが新設されました(写真1)。屏風絵など大型作品の展示が可能になりました。旧図書館(関西大学最古の建物)の閲覧室であった現在の特別展示室には、二列に3本、計6本の角柱が立っており、天井が高く、



写真1 講演会「素庵と宗達」講師 林 進

その白い漆喰が美しく、部屋全体に重厚な趣が感じられます。古い建築の魅力です。

平成26年度夏季企画展は予定していなかったので、展覧会開催の予算が当然ゼロであることは承知しておりました。展観が始まる6月15日まで、準備期間はわずか二ヵ月間しかありません。ですから、まず出来ること、出来ないことを区別しました。展覧会図録及びポスターの制作は、予算と時間がないので行わない。美術品専用輸送車（梱包・開梱作業、及び保険が含まれる）は使用しない。出陳その他の謝礼金はなしにする。関連催事の講演会（一回）とギャラリートーク（列品解説）は、自分自身（林進）が行い、その日時は担当の博物館実習の日時に当てることにしました。一方、企画展に必要な展観チラシ（広報用）、出陳品目録、キャプション等展示札の作成は、事務経費の一部を当ててもらおうことにしました。

今回の企画展のテーマを「角倉素庵と俵屋宗達」にしました。現在、自分が研究しているテーマであり、すぐに実施できると思ったからです。かつて大和文華館で平成14年（2002）秋に特別展「没後三七〇年記念・角倉素庵一光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で一」を行い、また昨年6月から本年3月まで、東京渋谷Bunkamuraで毎月一回の連続講座（全10回）「宗達を検証する一友人角倉素庵の視点から絵師宗達の真実に迫る一」を行いました。素庵と宗達の作品は、すでに実際に見ておりましたし、かつて取り扱ったことがありました。

実は、問題は、「角倉素庵と俵屋宗達」というテーマです。一般の方はご存じないと思いますが、素庵と宗達の二人の関係は、今まで日本美術史で取り上げられたことはありません。従来美術史の枠組みでは、本阿弥光悦を中心とする構図で語られております。すなわち、俵屋宗達は光悦によって見出された画家というのが定説（通説）だからです（光悦と宗達の実証することは出来ません）。また角倉素庵の名前は、美術書のどこにもありません。新たな枠組みを提示することは、学界と世間の通念を相手にすることで困難なことです。一方、楽しいことです。

関西大学博物館から私に提示されたのは、「関

心のあるテーマを、すきなようにやってよい」ということでした。今回、私は学界の通念、世間の常識にとらわれない学問のフロント（前線）を示す展観を試みました。それが大学博物館の真の目的だと思ったからです。公立や私立の博物館や美術館では、きわめて難しいことです。入館者数や採算を考慮しなければならないからです。

私は、定年後、研究のために、素庵と宗達の関係史料（書跡が主）、及び寛永期の書跡資料を精力的に蒐集し、五十件ほどを蒐集しておりました。博物館の特別展示室のケースに展示できる点数は、大型の屏風を含め、およそ百点と見ました。ですから、あとの五十点は親しい個人コレクター（お二方）、関西大学図書館ほか大学図書館・博物館（三ヵ所）、私の研究仲間に、展観の意義を理解していただき、さいわい希望する作品を拝借することができました。大阪青山歴史文学博物館と大阪樟蔭女子大学図書館は、作品貸与の条件として、美術専用輸送車と保険を掛けることが条件でありましたので、関西大学博物館と大学当局との協議で、二日間（借用と返却、四ヵ所）の美術品輸送車の使用が認められ、保険込みで日本通運に依頼しました。展覧会が成功したのは、大学当局の英断があったからだと思っています。また「関西大学創立百三十周年記念事業・関西大学博物館開設二十周年記念」と銘打ったことが有効でした。当初、コレクター自身に作品の輸送をお願いしておりました。厚かましいことを考えていました。

5月に入り、最初にA4判の「展観チラシ」（表裏カラー図版）を作りました（写真2）。これは展観関係文書の中で最も重要な広報文書です。チラシのデザインは、博物館が長年依頼している印刷会社のデザイナーによるもので、上品なチラシに仕上がりました。

つぎにやることは、「展示設計」です。展示ケースの図面に展示資料の名称、小テーマを書き込んでいきます。ケースは、壁に付けられた独立タンス型ケース（A1～A10）10基、俯瞰ケース（B1～B10）10基、独立行燈形ケース（C1～C4）4基、壁付長大ケース（固定）です。それぞれテーマ（「角倉素庵書状より判明する真実—素庵の人柄と宗達の居住地—」「角倉素庵の書跡」など）を設け、個々のケースに「展

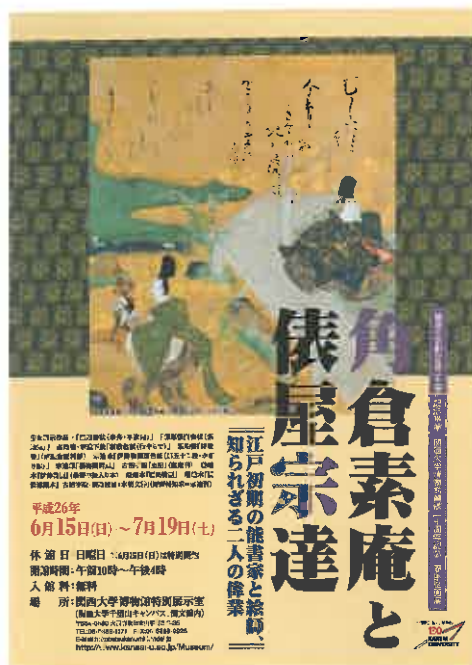


写真2 展覧チラシ(表・裏)

示デザイン」を行いました。ちょうど論文の章立てを作るように、各ケースに資料(予定作品)を当て嵌める作業です。それによって、必要な展示資料がわかります。それに基づき、「所蔵家別借用リスト」を作成します。ここにすべての情報(所在、連絡、人名など)を書き込みます。つぎに「出陳品目録」を作りました。今回は展覧図録を作りませんので、その代りA3判用紙を二枚重ねて二つ折りにし、8ページの目録(中綴じなし)を作りました。「展覧の趣旨、及び角倉素庵と俵屋宗達」(見開き二頁)、「出陳品目録」(見開き二頁)、「素庵・宗達関係年譜」(見開き二頁)、「素庵書状」と「嵯峨本」の解説文を掲載しました。私がこれまで研究してきた成果をこの「出陳品目録」に集約しました。「出陳品目録」から、「作品のキャプション」を作成します。

7月5日(土)のワークショップ「嵯峨本活字フォントの魅力」は、博物館事務局をお願いして急遽開催されたものです。版本書誌学の第一人者・森上修氏、多摩美術大学教授でグラフィックデザイナー・永原康史氏、著名な書体設計士・鳥海修氏、ブックデザイナー・尾形忍氏の話はいずれも興味深く、有意義な会になりました。大部な配布資料は今後、活字書体研究やフォントデザインに大いに役立つものでしょう。

また7月12日(土)の講演会「素庵と宗達」(講

師・林進)は、特別展示室で作品に囲まれての開催となりました。出席者は約90名で、独特な雰囲気の中での講演を楽しんでいただきました。講演と同じ内容の書籍(仮題「角倉素庵と俵屋宗達」)を、来年、東京の敬文舎から出版する予定です。また再来年に八木書店から研究書『宗達を検証する』(連続講座をまとめたもの)を出版する予定です。今回の出陳品を多数掲載いたします。

藪田貫館長のご提案、熊氏撮影になる二枚一組のチケットフォルダー(宗達画をデザインしたもの)は、今回の企画展の素晴らしい記念の品になりました。

謝辞

この度の展覧に、貴重な作品と書籍をご貸与賜りました所蔵家の皆様、関西大学図書館・大阪青山歴史文学博物館・大阪樟蔭女子大学図書館の関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

今回の企画展では、学芸員の山口氏をはじめ博物館事務室の皆様、展示室受付の大学院院生の皆様、いっしょに企画実施を行っていただきました立命館大学非常勤講師本多潤子さんにはたいへんお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

関西大学文学部 非常勤講師 元大和文華館学芸員

大阪樟蔭女子大学図書館所蔵嵯峨本『古今和歌集』雑考

本 多 潤 子

はじめに

夏季企画展「角倉素庵と俵屋宗達—江戸初期の能書家と絵師、知られざる二人の偉業—」には、多くの嵯峨本が出陳された。大阪樟蔭女子大学図書館所蔵の『古今和歌集』[911.1351/K1]（以下、樟蔭本と略す）はそのうちの一点である。平安時代初期に成立した勅撰和歌集、『古今和歌集』を最初に刊行した版本として、その資料的な価値は高い。

本稿では、まず樟蔭本の基本的な書誌を確認する。さらにその書入れから、近世において嵯峨本がどのように使用されていたのか、その一端をうかがう。

樟蔭本の書誌

樟蔭本は袋綴じの大本二冊（27.5×18.5㎝）、上冊八十六丁、下冊九十丁で刊記はない。表紙は朱色菱形雷文つなぎで、現存する伝嵯峨本『古今和歌集』諸本のうち、国立国会図書館本[857-57]、国文学研究資料館初雁本[12-56]と同一の装丁である。左肩の題簽に「古今和歌集 上（下）」（16.6×3.2㎝）とある。丁付は一部の丁のノドに「古今下四十六」等。整版で匡郭はなく、本文半葉九行、和歌は一行書、詞書が三字下げで刻されている（図1）。上冊が仮

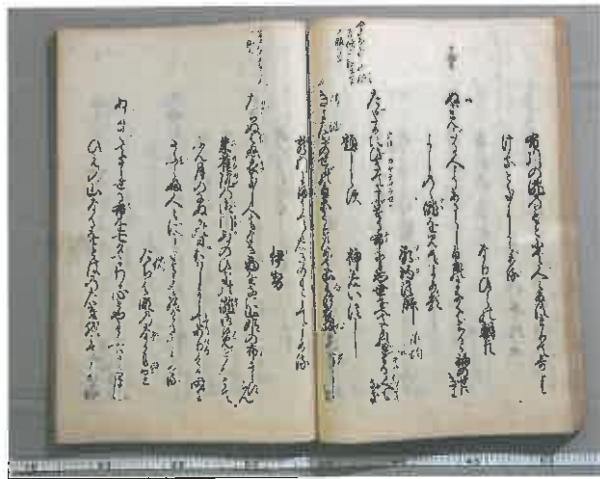


図1 樟蔭本下冊五十五丁ウラ-五十六丁オモテ
卷第十七雑歌上 [923]-[927] 番歌

名序から卷十物名まで、下冊が卷十一恋歌一から卷二十までと真名序、本奥書を収録する。卷十までは巻頭が各丁ウラよりはじまり、卷十一以降は各丁オモテよりはじまる形式に統一されており、当初から上下二冊という体裁であったと考えられる。本紙は素紙であり、具引きや色変わりといった料紙は用いられていない。

刷の状態は、全体に良好であるが、上冊巻第五秋歌下「もみちせぬ」歌[251]¹⁾の「み」に欠けが見られる（図2）。これは、現存する伝嵯峨本『古今和歌集』諸本のうち、国立国会図書館本二種[831-17]、[857-57]の「もみちせぬ」歌[251]（図2）にも認められ、同一の版本を用いていたことが確認できる。

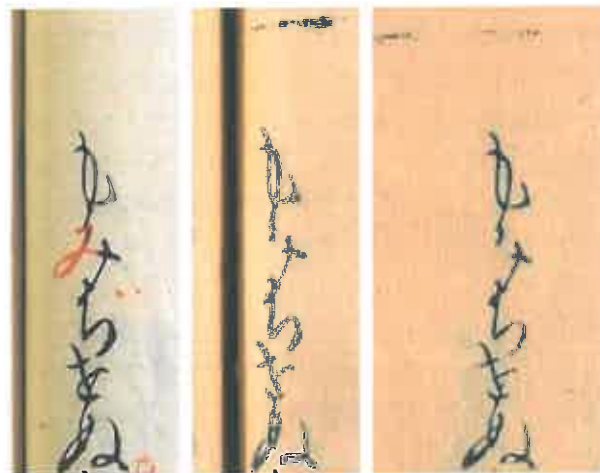


図2 「もみちせぬ」歌 樟蔭本（左）、国立国会図書館本[831-17]（中央）、国立国会図書館本[857-57]（右）

本文系統に関しては、下冊末に、

貞応二年七月廿二日 癸亥 戸部尚書藤 在判

と藤原定家・貞応本の奥書を刻する。以後、近世に刊行された『古今和歌集』の多くは、この貞応本系統の本文を有する。近世に最も流布した『古今和歌集』本文である。貞応本系統における伝嵯峨本の本文異同に関しては、川上新一郎氏の御論考²⁾に詳しい。

樟蔭本の書風は、華麗な料紙装飾が施された写本の嵯峨本『古今和歌集』（図3）と似通う。



図3 嵯峨本写本『古今和歌集』（林屋辰三郎『光悦』第一法規出版、1964年より転載）
卷第十七雑歌上 [923]-[926] 番歌（図1に対応）
卷第十六哀傷歌 [837]-[840] 番歌

書入れについて

樟蔭本には多数の書入れがみられる。上冊には主に朱書、下冊には墨書で書入れがあり、同一人物の手によると考えられる。仮名序、真名序には句点・濁点、卷二春歌下以降の和歌には濁点・読み仮名、そして一部に頭注が加えられている。なお、上冊九十丁オモテには、朱書で、

文久二年^{壬戌}閏八月疾疫病中写本打聴ニヨリテ校正 武田千顙

と記されている（図4）。よって武田千顙（ただ・ちかい、1795-1867）という人物がこの

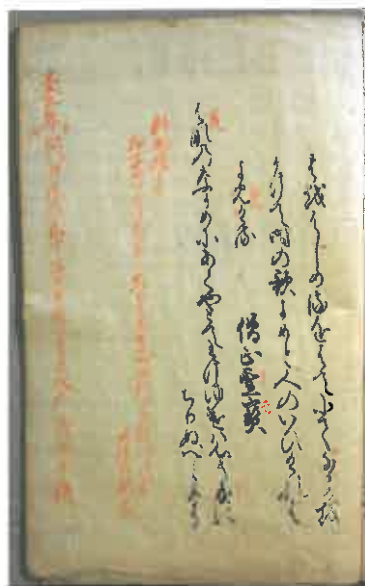


図4 樟蔭本 上冊最終丁 武田千顙識語

樟蔭本を所持し、文久二年（1862）に注を書入れたことがわかる。さらに、『古今和歌集打聴』（以下、『打聴』と略す）をもとに注が施されたと記されている。『打聴』は、賀茂真淵が『古今和歌集』を講釈したもので、寛政元年（1789）には上田秋成修訂によって刊行されている。

書入れと賀茂真淵『古今和歌集打聴』

『打聴』が全和歌に注釈を施しているのに対し、樟蔭本の書入れは一部の和歌にとどまる。

まずは朱書の一例を挙げる。上冊六十九丁ウラ『古今和歌集』卷第八離別歌（図5）の冒頭三首、[365-367]のうち[366]番歌、

よみ人しらす
すかるなく秋の萩原朝たちてたひゆく人を
いつとかまたん

に関して、千顙は朱書で、

日本紀ニ^{クハラ}蜷^{ジカハ}蠟ト書テスガルトヨメリ
一二ハ似我蜂トモ云々

と、頭注を入れ、さらに、和歌本文に、読み仮名「ハギハラ」、「ひ」に濁点「゛」を加えている。なお、前後の和歌には、濁点・読み仮名のみを書入れている。

この和歌に関する『打聴』の注を確認する³⁾。『打聴』は、前後の和歌にも注釈がなされ、「すかるなく」[366]の注釈は頭注と左注が付され

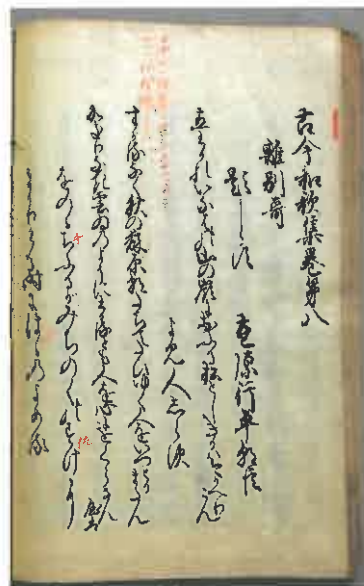


図5 樟蔭本 上冊六十九丁ウラ
卷第八離別歌 [365-367] 番歌

ている。『打聴』頭注は、千顚の書入れとは一致しないが、和歌の後に二字下げで記された左注には、

すがるは日本紀に^{クハラ}蜾蠃と書いてすがるとよめり、一には似我蜂とも云、此蜂は桑の木
の蟲をおび来て己が巢にて七日咒ひぬれば
己が如き蜂となれりといへり、(以下略)

とあり、冒頭箇所を千顚が樟蔭本に書入れていることがわかる。また、『打聴』の表記と樟蔭本和歌本文に加えられた濁点も一致する。

一方、樟蔭本下冊に墨書にて記された書入れは、必ずしも『打聴』のみに依るものではない。「打聴に云」とある注の他に、「遠鏡云」と、本居宣長(1730-1801)の『古今集遠鏡』より引用されている箇所が散見する。『古今集遠鏡』は、寛政五年(1793)頃、つまり『打聴』より後に成立した俗語訳である。

他、朱書の書入れは、「六帖二」「奥義抄二」と書名が記されているが、皆『打聴』からの孫引きなのに対し、墨書の書入れには、『打聴』に依らないものがあることが大きな特徴である。

武田千顚について

以上のような書入れをした武田千顚とは、どのような人物であったのか。『愛媛県史 人物』⁴⁾によると、武田千顚は大洲藩士で、江戸の村田春海について国学を修め、和歌に秀でていた、とある。歌集に『萩屋集詠草十二』(天保三・四年詠歌)があり、村田春海に点を乞っている。また、その詠歌が『鄙のてふり』(半井梧庵編、安政元(1854)年刊)、『藤の花ふさ』(近田八束撰、上巻・武田足穂二十首、中巻・千顚十二首)、『宇和島大洲百廿番歌合』などに入集している⁵⁾。ここから、伊予の大洲藩の歌壇で中心的な歌人の一人として活躍していたさまがうかがえる。

また、早稲田大学図書館に、武田千顚が書写した、『国史蒙求』[リ05 05066]が伝存する⁶⁾。その奥書には、

豫州大洲藩／山田松三郎久章著
門人従弟／武田千顚

とある。山田久章(東海、1788-1848)は大洲藩の儒学者であり、『国史蒙求』は中国の類書『蒙求』に倣い、四字句で本朝古代の人名・事蹟を列挙したものである。主に『日本書紀』から故事を取り上げている。一例をあげると、十二丁ウラに、「蜾蠃捉雷」という四字句がある。これは、『日本書紀』雄略紀の蜾蠃という人物の故事をあらわしたものである。この「蜾蠃」という『日本書紀』由来の語は、前述の樟蔭本巻第八「すかるなく」[366]歌の書入れにも登場する。『打聴』からの抜書きは、千顚の学問の方向性を探る上でも興味深い。

近世国学者の書入れ

最後に、他の伝嵯峨本『古今和歌集』諸本の書入れを一部確認する。樟蔭本と同様に、近世の国学者が和歌に関する注釈を書入れた例としては、国立国会図書館本[831-17]がある。上冊最終九十丁ウラと、下冊裏表紙見返しに、

服部安五郎平高保

と記されており、賀茂真淵門下の国学者、服部高保(1734-1793)が所持していたことがわかる。その書入れは、朱書は語釈が中心であるが、巻一春歌上には傍注として墨書で、和歌の俗語訳の書入れがある。その俗語訳は高保と同時代に活躍した本居宣長の『古今集遠鏡』に依る。

以上、近世初期に刊行された伝嵯峨本『古今和歌集』のうち、複数の諸本が近世中期以降の国学者達の古典研究のテキストとして利用されていた。近世国学の発展を考える上でも、嵯峨本出版の意義は大きい。

【注】

- 1) 以下、引用和歌には国歌大観番号を付す。
- 2) 川上新一郎氏「古今和歌集版本考(続)」『斯道文庫論集』35 2001年
- 3) 『賀茂真淵全集』9(続群書類従完成会、1978年)収録の寛政元年刊本を用いる。
- 4) 愛媛県史編纂委員会『愛媛県史 人物』1990年 390頁
- 5) 愛媛県史編纂委員会『愛媛県史 部門・文学』1984年 131、155頁
- 6) 早稲田大学図書館古典籍総合データベース
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri05/ri05_05066/index.html

「牧村史陽氏旧蔵写真」の研究とデジタルアーカイブ化

内 田 吉 哉

関西大学大阪都市遺産研究センターでは、大阪の郷土史家・牧村史陽氏が撮影した写真資料「牧村史陽氏旧蔵写真」を所蔵している。牧村史陽氏（1898～1979）は大阪船場の木綿問屋に生まれ、大阪大倉商業学校（現在の関西大倉高校）を卒業後、家業は他人にゆずって大阪郷土史の研究に没頭した。「牧村史陽氏旧蔵写真」は、その郷土史調査の際に撮影された写真資料である。写真資料は総数6444点、うち5923点は印画紙に現像された状態で保管されている。521点はガラス板に写真乳剤を塗布した、写真乾板の状態である。

大阪都市遺産研究センターでは、現在、「牧村史陽氏旧蔵写真」のデジタルアーカイブ化を進めている^{（註1）}。それと同時に、デジタルアーカイブ化による検索・閲覧の利便性向上にともなって、「牧村史陽氏旧蔵写真」自体の資料研究も進歩をとげている。

牧村史陽の研究活動の一つに、「佳陽会」での活動がある。「佳陽会」は大阪の郷土史研究会である。牧村史陽は、昭和27年（1952）に大阪市主催の成人学校の郷土史講座で講師をつとめた。講座終了後に、受講生から、このまま終わるのは惜しいとの声があり、それを受けて発足したのが佳陽会である。「佳陽会」の名前は、成人学校での講座が毎週火曜日であったことから、もじってつけたものであるという^{（註2）}。佳陽会は、その会報として『佳陽』を刊行していた。『佳陽』には、会での研究活動報告や、大阪郷土史に関する連載記事が掲載されている。『佳陽』に掲載された記事と写真図版を、デジタルアーカイブ化された「牧村史陽氏旧蔵写真」と比較検討することで、いくつかの新しい知見が得られた。

筋金入りのカメラマニアを自認していた牧村史陽であるが、『佳陽』に初めて牧村史陽撮影の写真図版が掲載されたのは、昭和44年（1969）2月に刊行された『佳陽』第14号である。佳陽会の発足から17年が経過していることと考え合

わせると、思いのほか新しいと言える。それまで『佳陽』に写真図版が掲載されなかった理由は、『佳陽』第14号の編集後記によると、主に経費の問題と、当時の編集作業において写真図版の挿入が現在ほど容易でなかったことにあるとされる。なお、佳陽会の発足が昭和27年、その後『佳陽』の刊行は途中で2度の断絶を挟んでおり、この第14号は「第3次」の『佳陽』のものである。

初めて掲載された写真図版は、「質問手帖」という記事に添えられたもので、大阪の橋に関する質問に牧村史陽が答える内容となっている（図1）。この記事で牧村史陽は、難波橋について書いており、その中で市電が堺筋を通ることになった経緯にふれている。市電についてのくだりに関連付けて、写真図版には「電車の通っていたころの難波橋」との説明がつけられている。『佳陽』の牧村史陽執筆記事では、この他にも同様に「過去の様子」として写真を紹介する例が見られ、牧村自身も自分の写真コレクションが、「大阪の都市景観の変遷」を記録した資料であると意識していたことがうかがえる。



図1 難波橋（昭和29年7月撮影）

なお『佳陽』第14号の「質問手帖」以降、牧村史陽は、『佳陽』に「あのはしこのはし」という、大阪の橋に関する連載を開始する。すると、毎号の連載に合わせるために、新たに写真を撮影する必要に迫られ、牧村史陽は、記事執



図2 梅之橋（昭和44年10月撮影）

筆当時の「今の写真」を『佳陽』に掲載するようになる。

図2は、『佳陽』第21号（昭和44年11月刊行）の「あのはしこのはし」に掲載された写真である（図2）。記事は、大阪の橋のうち、最も小さい橋として高津宮（大阪市中央区高津）にかかる梅之橋を紹介する内容である。「牧村史陽氏旧蔵写真」では、この写真は昭和44年10月15日の撮影となっている。『佳陽』第21号の発行の1か月ほど前の日付で、つまりこの記事のために撮影した写真だと考えられる。記事の中で牧村は「この間久しぶりに写真をとりに出かけていったら、その池もカラカラに乾あがっていた」と記している。すなわちこの写真のことを指すものであろう。

『佳陽』の記事から、「牧村史陽氏旧蔵写真」に不足する情報を補うことができた事例もある。図3と図4は、写っている景観や印画紙の状態から、同時期に同じ場所で撮影された写真であると考えられる（図3）（図4）。このうち図3は、平成26年（2014）5月18日から23日にかけて、大阪都市遺産研究センターで開催された写真展「牧村史陽の写真でみる大阪」に出展されたものである。この写真は、撮影日時や場所についての情報が残されていない。そのため展示に際しては、写真の中に見られる建物から撮影場所を割り出し、画面を横切るスクーターの車種と年式から、おおよその撮影年代を推定して解説を書くことになった。ところが『佳陽』を調べると、図4は昭和45年（1970）10月刊行の第29号に掲載されていたことが判明する。牧村史陽の連載「あのはしこのはし」の、相合橋について書かれた記事に添えられたものであ



図3 相合橋①（昭和27年撮影）



図4 相合橋②（昭和27年撮影）

る。記事中で「写真は、昭和27年ごろの相合橋、南詰から北方を見る」と説明されている。

以上、郷土史研究会「佳陽会」の会報『佳陽』の調査を通じて、「牧村史陽氏旧蔵写真」について新しく知り得たことをいくつか紹介した。これまで「牧村史陽氏旧蔵写真」は、その資料点数の多さから、全ての写真を網羅的に調査することが難しかった。デジタルアーカイブ化の進展に伴って、求める情報に応じた写真を探し出すことが容易になり、こうした検証も可能になった。

註1 林 武文「牧村史陽氏旧蔵写真データベースの構築」
（林 武文・内田吉哉編著『「牧村史陽氏旧蔵写真」
目録』大阪都市遺産研究叢書 別集6、大阪都市遺産
研究センター、2014年）

註2 『佳陽』第1号、昭和42年9月

◆ 博物館だより

◇平成25年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	25	27	23	0	0	0	6	4	0	0	0	111
入館者数	1,272	1,688	1,690	1,885	0	0	0	484	103	0	0	0	7,122

(展示室全面リニューアル工事のため7/29～3/31まで原則として休館)

◇1994年4月に開館した関西大学博物館が、このたび20周年を迎えました。図書館の創設100周年の節目もあり、両館の連携企画展として「関西大学名品万華鏡一館選イチョシ！」を4月1日から5月18日まで開催しました。3月31日には、オープニングセレモニーと「寄贈者芳名板」の除幕式を学内外関係者49名出席のもと、執り行いました。この連携企画展には、5,570名の方にご来場いただきました。

また、開館20周年を記念し、博物館実習実践研修会「博物館の明日をきたえる」を開催しました。藤枝宏治氏による表装研修(6月23日)、河内國平氏・河内晋平氏による日本刀研修(6月28日)、佃一輝氏による煎茶研修(7月7日)に、あわせて89名の参加者を数えました。

◇夏季企画展として「角倉素庵と俵屋宗達 江戸初期の能書家と絵師、知られざる二人の偉業」を6月15日から7月19日まで開催しました。この企画展の来場者は、3,162名でした。(本紙8頁参照)



◇「キッズミュージアム」(旧称なんでも相談会)を7月24日と8月1日・2日に実施しました。7月24日は万葉書作家の鈴木葩光氏指導による一日書道教室、8月1日と2日は、恒例の体験型イベントを実施し、3日間で1,538名の皆さんに楽しんでいただきました。

◇本館が代表を務めるかんさい・大学ミュージアム連携実行委員会は、平成26年度も引き続き文化庁から補助金の採択を受け、15の大学ミュージアムが連携して、スタンプラリーやバスツアー、学生を交えた祭礼調査など、様々な行事を実施します。一方、北大阪ミュージアム・ネットワークとしては、11月15日・16日に国立民族学博物館を会場に北大阪ミュージアムメッセを開催します。ぜひご来場ください。

◇本年度上半期に大門博氏から書籍3点、木原義浩、富美子ご夫妻から拓本2点、筒井俊晴氏から日本刀等6点、名誉教授下間頼一氏から貝多羅経1点(本紙7頁参照)、さらに元大阪毎日新聞社社長(本館本山コレクション収集者)の本山彦一氏の御令孫である上杉康彦氏から本山彦一遺愛の手焙(携帯用火鉢)1点の寄贈がありました。

今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

編集後記

表紙は、黒漆塗玳瑁螺鈿合子です。作者の北村昭斎氏は、平成11年(1999)、螺鈿技法により国から重要無形文化財保持者(いわゆる人間国宝)の認定を受けた漆芸界の第一人者です。選定保存技術保持者として正倉院宝物をはじめ、国宝や重要文化財指定の漆芸品の修理も手がけています。この合子は、正倉院御物研究で解明した技法を駆使し、木地の構造から(技法)、玳瑁(鼈甲)や螺鈿、蒔絵、平文(金銀の薄板を文様にする技法)など、加飾法の粋を結集した傑作です。

